



堂々と正論を

伊藤 富雄*

技術屋というのは、手からさきに生れて来たようなもので、口べたな上に、その手といっても、研究論文以外のものを書くのは、至って不得意なようである。ところが、技術屋の周辺には、文字通り口からさきに生れた事務屋がいるし、時にははったりをきかせる政治屋のほか、ブン屋などという口八丁の連中がうろろうしている。

ブン屋といえば、無冠の帝王だとか、ペンは剣より強しとか、偉そうなことをいうが、これほど無責任で公正を欠いたものはない。例えば、田中内閣のできたころ、今太閤もてはやしながら、事件が発生すると、舌の根も乾かぬうちに平然とこきおろす。私のような者にも、事故や問題が起こると、深夜電話で問い合わせが来るが、それはやむをえない事故で当局に責任はない、などと答えようものなら、翌朝の新聞には一行ものらず、デスクの意向に合致した進歩的な人の意見だけが、堂々と掲載される。また、紛争中、工学部長をしていたとき、大新聞がわれわれの意見も聞かず、組合や学生側から一方的に取材して記事を書くので、私はブン屋をしっかりとつけた記憶がある。

このような状態であるから、今までのよう

に、技術屋がただ黙々と仕事を続けていては、とんでもない事が起こり、工業が諸悪の根源であったり、原子力が人類を破滅に導くといった暴論がまかり通ることにもなりかねない。したがって、今後われわれ技術屋は、声を張り上げペンに力をこめて論陣を張り、正論を堂々と世に問わなければならない。もちろん、そのテーマには事欠かない。例えば、わが国に今日の繁栄をもたらしたのは何か、その工業が壁に突き当たって、独自の科学技術開発のために苦悩しているとき、政府は国会は何をしているのか、あたら英才の芽を摘み取るような教育の中から、独創性に富んだ科学者・技術者が生まれるとでもいうのか、原子力が駄目ならそれに代わるエネルギーはどうするのか、公共心のない国で公共事業をどのようにして進めよというのか、開き直って問いかけたいことはいくらでもある。また、原発の事故にしても、包みかくさず詳細を報告し、堂々と専門家としての意見を発表すべきである。

しかし、ここで特に大切なのは、こうして口を開き筆を執る代弁者が、技術評論家といった軽薄な人ではなくて、科学技術の発展のために長年血を吐く思いをした専門家であること、そしていま一つは、技術者仲間が、こうした代弁者またはその素質のある人々の足を引っ張らないことであろう。

*伊藤富雄 (Tomio ITO), 大阪大学, 工学部, 土木工学科, 教授, 日本学術会議会員, 工学博士, 土木工学, 土質基礎工学